梅林遺跡7

第7次調査

2004 福 岡 市 教 育 委 員 会

梅林遺跡7

梅林遺跡第7次発掘調査報告



遺跡略号 UBY 7 遺跡調査番号 0157

2004 福 岡 市 教 育 委 員 会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところです。

本報告による梅林遺跡では、近世の水田跡、古代の溝、その他遺物を多く確認することができ、当時の歴史的環境を知る上で貴重な成果を挙げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会 教育長 生田 征生

例 言

- 1.本書は平成14年(2002年)に福岡市教育委員会が実施した梅林遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。各調査地点の所在地は別表によられたい。
- 2.遺構の実測は、阿部泰之が行った。
- 3.遺物の実測は、阿部が行った。
- 4.製図は、阿部が行った。
- 5.写真撮影は、遺構・遺物とも阿部が行った。
- 6.遺構番号は、全遺構の通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構番号は、溝(SD)・土壙(SK)・ピット(SP)・水田(SS)である。
- 7.遺物番号は各調査ごとに通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
- 8.本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21 西偏する。
- 9.本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
- 10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
	調査に至る経過1	
	調査体制1	
第2章	調査の記録	
	1.立地と環境5	
	2 . 調査の概要	
	3.第Ⅰ面の調査	
	溝(SD)5	
	水田跡(SS)6	
	4.第Ⅱ面の調査	
	溝(SD)6	
	土壙(SK)9	
	③ 遺構検出面出土の遺物9	
	5.小結9	
第3章	まとめ10	
	挿図目次	
	押凶日从	
Fig .1	調査区位置図 (1/8,000)	
Fig 2	調査区位置図 (1/1,000)	
Fig 3	調査区全体図 (1/200)	
Fig 4	I 区 SD01溝出土陶磁器実測図(1/3)6	
Fig 5	区南壁 SD06溝土層断面実測図(1/40)6	
Fig .6	区北壁土層断面実測図(1/50)7	
Fig .7	区東壁土層断面実測図(1/40)7	
Fig &	区 SD06・07溝土層断面実測図(1/40)7	
Fig 9	SD06溝出土土器実測図 (1/3)8	
Fig .10	SD07溝出土土器実測図 (1/3)8	
Fig .11	区南壁 SD06・07溝土層断面実測図(1/40)8	
Fig .12	SD06溝出土石匙実測図 (1/2)9	
Fig .13	SK04土壙検出状況実測図 (1/20)9	
Fig .14	遺構検出面出土遺物実測図(1/3)9	
	図版目次	
PI .1 1	. 区第Ⅰ面全景(南より) 2. 区第Ⅱ面全景(南より) 3. 区全景(北より)	
PI .2 1	. 区第I面全景(南より) 2. 区第II面全景(南より) 3.第I面 SD01溝検出状況(南より)	
PI .3 1	. 区 SD06・07溝検出状況(西より) 2 . 区南壁 SD06・07溝土層断面(北より) 3 . SK04土 壙検出状況 (南より)	
PI .4 1	. 区北壁土層断面(南より) 2. 区東壁土層断面(西より)3.出土遺物	

第1章 はじめに

調査に至る経過

都市計画道路梅林通線は、昭和21年に都市計画決定された、城南区梅林7丁目から、梅林4丁目に至り、福岡外環状道路に接続する総延長240mの道路である。

平成13年8月23日、土木局道路建設部西部建設第1課から、都市計画道路梅林通線道路舗装工事予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、調査の依頼が教育委員会文化財部埋蔵文化財課(以下、埋文課)に提出された(土木第1255号)。申請地は、周知の文化財包蔵地である梅林遺跡の範囲内であり、隣接する外環状道路用地では、古墳時代の水田跡が検出されていた。そのため、これを受ける形で、同課は、申請地内にて遺構の遺存状態確認のため、試掘調査を実施した。その結果、記録保存のための発掘調査が必要であると決定された。

発掘調査は、土木局道路建設部西部建設第1課・埋文課の2者で、発掘調査願・契約などで協議を 重ね、工事工程にあわせたかたちで、梅林遺跡第7次調査として本調査を実施した。

調査体制

調査体制は、下記の通りである。本調査・整理作業・報告書作成は、土木局道路建設部西部建設第 1課をはじめ、関係者および周辺住民各位の理解・協力の下、順調に推移した。記して感謝の意を表 するものである。

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長 生田征生

文化財部長 堺徹 柳田純孝(前任)

埋蔵文化財課長 山崎純男 同調査第1係長 力武卓治 山口譲治(前任)

試掘調査担当 滝本正志 調査担当 阿部泰之

庶務担当 後藤康子 川村浩旭(前任)

調査作業員 岩室博子 梅野眞澄 木田ひろこ 栗木和子 柴藤清志 辻節子 辻哲也

徳永洋二郎 西川吾郎 松本順子 三谷朗子 安河内史郎

整理作業員 窪田慧 黨早苗

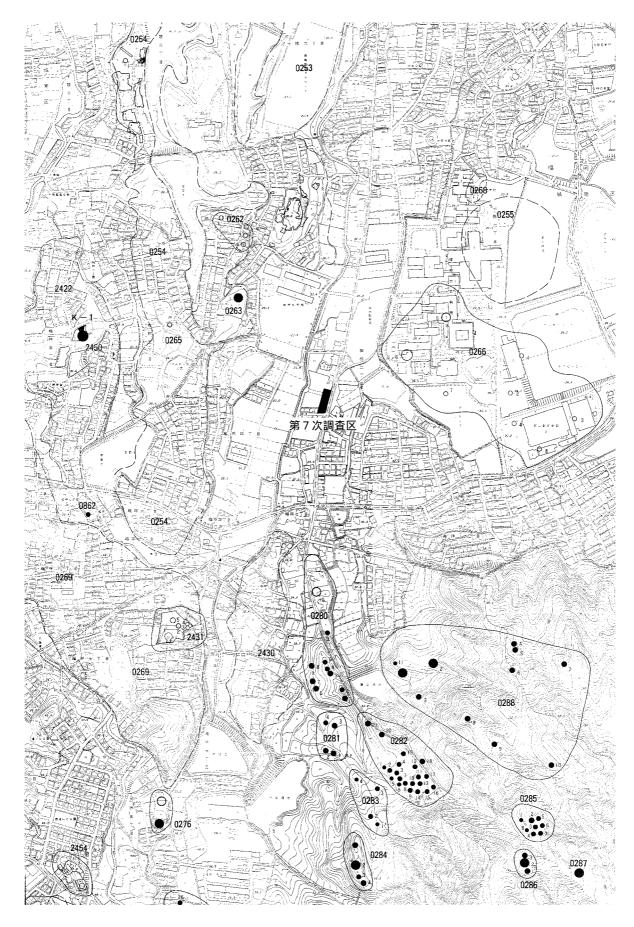
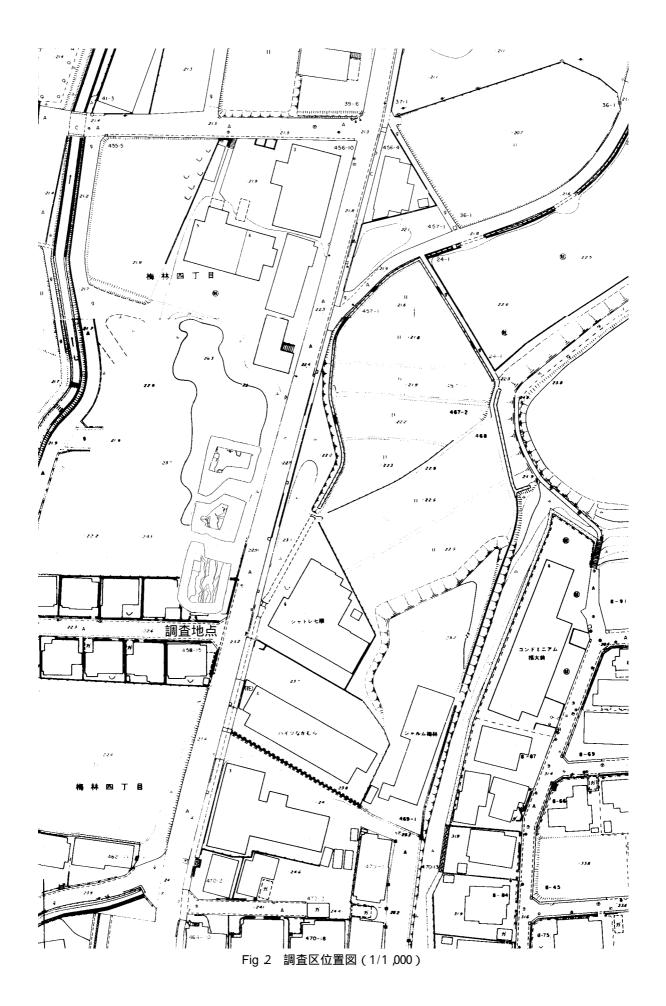


Fig .1 調査区位置図 (1/8,000)



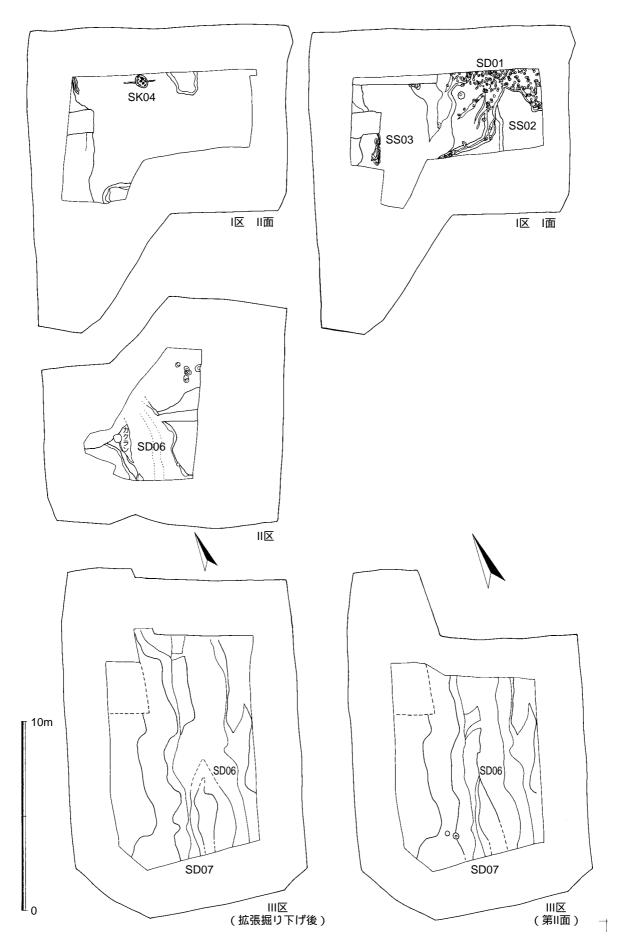


Fig 3 調査区全体図 (1/200)

第2章 調査の記録

1.立地と環境

梅林遺跡は、西側を飯倉低丘陵、中央に七隈側を挟み、東を標高約600mを測る油山から西に伸びる丘陵にはさまれた、丘陵斜面およびそれらの間に入る谷部に範囲を持つ遺跡である。以下、周辺の遺跡・梅林遺跡の既往の調査について、概観したい。

油山山麓には、派生する低丘陵の尾根線上に多くの古墳がつくられている。東側の丘陵上には、福岡大学構内に大半が含まれる七隈古墳群 A 群が分布する。西側の丘陵上には、高い部分に干隈古墳群・低い部分に飯倉 G 遺跡が分布する。飯倉 G 遺跡では、既往の調査において弥生時代終末の石蓋土壙墓・古墳時代後期の製鉄炉を伴う集落・古代から中世にかけての墳墓・中世の集落が検出されている。

梅林遺跡は、福岡外環状道路建設に伴い、初めて本格的な発掘調査が行われた遺跡である。外環関係の調査は、合計5次にわたり行われている。七隈側右岸の丘陵斜面で行われた第1次調査では、古墳時代の大規模な掘立柱建物群が検出されており、居館跡と推定されているほか、平安時代の水田跡が検出されている。七隈川左岸にて行われた第2次調査では、縄文時代の落とし穴・古墳時代の竪穴住居跡・古墳から中世の掘立柱建物跡・古墳から近世にかけての溝などが検出され、特に古墳時代の住居跡は、第1次調査において検出された掘立柱建物群との関係が注目される。また、住居跡にはオンドル構造があったと考えられている。七隈川右岸の低地にて行われた第3次調査では、近世から古墳時代にかけての溝・畦畔跡・水田跡、中世後半の里道跡・古墳から戦国期の土壙などが検出されている。特に水田跡は全部で4面にわたって検出されている。

2.調査の概要

梅林遺跡第7次調査区は、七隈川の右岸に開析された低地上に位置する。本調査区の北隣接地では、第3次調査が行われており、近世から古墳時代にかけての水田跡などが、4面にわたり検出されている。

今回の調査では、遺構面を 2 面検出した。第 面は、標高約20 4~20 2m を測る黒灰色粘性砂質 土上、第 面は、標高約20 2~20 0m を測る青灰色シルト質土上にて検出された。

第 面にて検出された遺構は、水田3区画・溝1条である。水田は東から西に向かって段状に築成され、その間を溝が流れる形となっている。第 面にて検出された遺構は、溝2条・土壙1基である。溝の埋土は、砂と粘土の互層となり、水路であった可能性が指摘できる。

3.第 面の調査

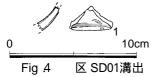
溝(SD)

SD01溝(Fig.3·6 Pl.1 1·2 3)

区にて検出した。水田跡を区画するように調査区東側から南西方向に流れる。全体は把握できなかったが、調査区中央付近で数条に分岐し、一部の流れは調査区南側に伸びる。分岐点に、流れに直行するように杭列を検出した。底面には多くの生痕を有する。水田に導水するための水路であろうか。

出土遺物(Fig.4)

1は、肥前系の染付である。体部の小片で、器壁の厚みから、より底部に近い部分の破片と思われる。外面に淡青色に発色する文様が施される。胎土は、灰白色を呈する。釉薬は、内外両面にかけられ、淡い青色に発色している。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。



土陶磁器実測図(1/3)

水田跡 (SS)

区第 面で2面検出している。洪水による砂層の堆積まで重機で掘り 下げ、その下層を水田面として調査を行った。調査区が狭小であるため全 体像はつかみがたいが、調査区内ではⅡ面が2段をなして形成されてお り、その間隙にSD01溝が流れている。今回検出した水田区画に導水する ための水路の可能性が高い。畦畔は、検出されなかった。

なお、 区では、基盤層の上層は分厚い湿地性の堆積となり、水田区画は検出できなかっ た。

SS02水田跡(Fig.3・Pl.1 1)

区東半にて検出した。北面および西面を SD01溝により画される。耕作土は、黒灰色粘性砂質土 (Fig 6参照)である。水田面の標高は、東端・西端とも20 6m で、ほぼ平坦である。遺物は、耕作 土掘り下げ時に、土師器および須恵器の細片が出土した。

SS33水田跡(Fig.3・Pl.1 1)

区西半にて検出した。東面を SD01溝により、SS02と区画されている。SD01溝は SS03の東でと ぎれてしまう。直接この水田区画に水を流していたとも考えられる。東側は、さらに4~6cm 下が り、おそらく別の水田区画となるのだろう。田面西側に、細い溝状の堀り込みを検出した。役割は不 明。水田面の標高は、東端で20 3m、西端で20 2m を測る。遺物は、耕作土掘り下げ時に、土師器お よび須恵器の細片が出土した。

4.第Ⅱ面の調査

溝(SD)

SD16溝(Fig.5・8・11、Pl.1 3・2 1・2 2・3 1・3 2)

区および 区にて検出した。ほぼ南北方向に流れを持ち、SD07に切られる。幅1.6から3.0m、 深さ0.7~1.0mを測り、平面プランは、凹凸が激しい。埋土は、粗砂・細砂・シルトの互層となり、 流水のあったことが伺える。断面形は、緩いV字形を呈する。幾度も埋没・掘り直しを繰り返して おり、土層断面からは、近世と思われる堆積層が SD04溝の上面でくぼんで堆積している様子が見ら れた。

出土遺物(Fig.9)

須恵器:2~5は、坏身である。2は、1/2個体残存する破片で、復元で口径9 3cm・器高2 9 cm・底径6 2cm を測る。底部は回転ヘラ切りで、体部にはヘラ記号を有する。胎土は精良堅緻で、 焼成は良好である。3は、内傾するかえりを有する個体である。1/4個体残存する破片で、復元 で、口径10 3cm・器高3 5cm を測る。外底面に時計回りの回転へラ削りが施され、内底面は、不定

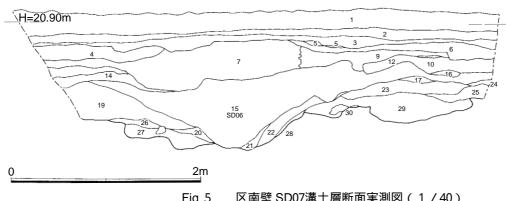
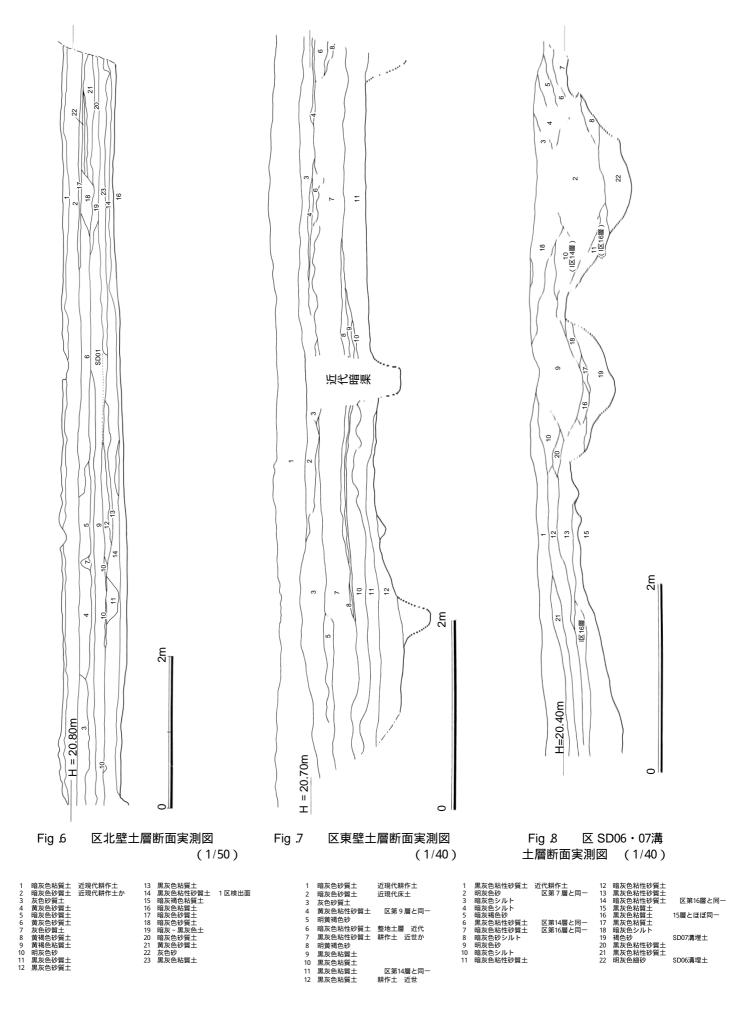


Fig 5 区南壁 SD07溝土層断面実測図(1/40)

暗灰色砂質土 近現代耕作土 暗灰色砂質土 床土 黄褐色砂質土 近現代盛り土 黒灰色粘性砂質土 近世~近付 黄褐色砂 黒灰色粘性砂質土 .に盛り上 近世~近代の耕作土 沂世耕作十 里灰色粘性砂質十 区 面検出面 暗灰色砂質工 黄褐色砂 暗灰色砂質土 黒灰色粘質土 黒灰色粘質土 黒灰色粘質土 暗灰色砂 暗灰色砂質土 暗灰色砂質土 暗灰色砂 ラミナ状 青灰色砂 ラミナ状 黒灰色も粘質土 暗茶色と料質生 明褐色細砂 青灰色シルト



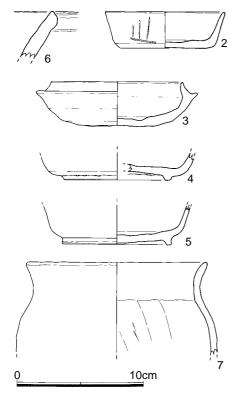


Fig 9 SD06溝出土土器実測図 (1/3)

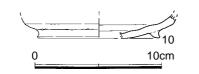


Fig .10 SD07溝出土土器実測図(1/3)

方向のナデにて仕上げられる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。4は、底部で1/4残存する破片である。口縁部を欠くため口径・器高は不明。復元で、底径7.8cmを測る。底部には回転へラ切り痕が残り、内底面は、不定方向のナデにて仕上げられる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。5は、底部で1/4残存する破片である。底部がやや上げ底状となる。口縁部を欠くため口径・器高は不明。復元で、底径8.4cmを測る。底部には回転へラ切り痕が残り、内底面は、不定方向のナデにて仕上げられる。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

土師器:6は、口縁部の小片である。甕の口縁部であろうか。胎土は精良で、焼成は良好。7は、甕である。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁で1/4個体残存している。復元で、口径13 8cm を測る。胴部内面には、下から上に向かってヘラ削りが施される。胎土は精良で、焼成は良好である。時期は8世紀代か。

石器:石匙が2点出土した。2点ともサヌカイトを用いる。8は、横長の剥片を加工し縦型となしている。バルブはカットされ、一方の端部に両方向からノッチを入れ摘み部を造る。縁部の一辺のみ連続する剥離を施し刃部を造る。9は、縦長の剥片を加工し横型となす。バルブは未調整。

区にて検出した。SD06溝にほぼ並行する溝で、南端部で幅1 $4 \sim 1.1$ m、深さ0 45m 前後を測る。断面形は不整な U 字形を呈し、埋土は褐色の砂である。

SD17溝(Fig.3・8・11、Pl.3 1・3 2)

出土遺物 (Fig.10)

土師器:10は、埦である。底部で1/6残存する破片で、 高台が低く、そのままでは外底面が接地する。復元で底径 9 4cm を測る。胎土は精良で、焼成は良好。他に板状圧痕を

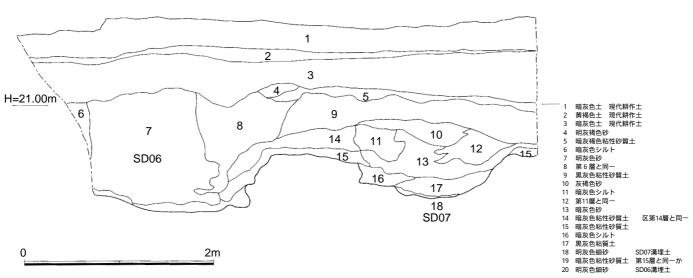


Fig .11 区南壁 SD06·07溝土層断面実測図 (1/40)

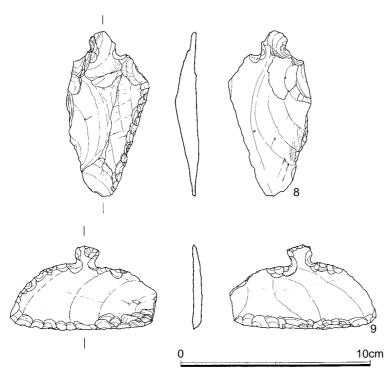


Fig .12 SD06溝出土石匙実測図 (1/2)

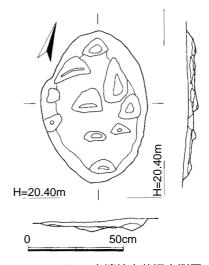


Fig .13 SK04土壙検出状況実測図 (1/20)

有する坏の破片が出土しており、 時期は中世前半頃か。

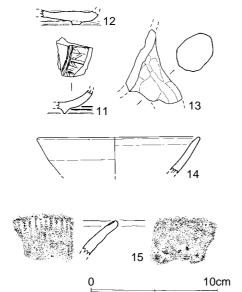


Fig .14 遺構検出面出土遺物実測図 (1/3)

土壙 (SK)

SK04土壙(Fig.13、Pl.3 3)

区北端部にて検出した。不整な楕円形の平面プランを持ち、長径0.8m・短径0.56m・深さ0.13mを測る。底面には鋤状の工具で掘ったと思われる半円形の小穴が検出されている。遺物は、出土しなかった。

遺構検出面出土の遺物(Fig.14)

陶磁器:11は、肥前系の染付碗である。底部の小片で、内面に文様を施し、外底面に2条の界線をめぐらす。

須恵器:12は、坏身である。底部の小片。

土師器:13は、脚付鍋の脚部である。ナデおよび指押さえ

にて整形される。14は、埦である。口縁部の小片。

縄文土器:15は、口縁部の小片である。外面に楕円押型文

・口縁内面に上下方向の刻み目を有する。

5. 小結

今回の調査では、近世と思われる水田跡、古代の流路を検出した。第 I 面の水田跡は、第 3 次調査検出の水田跡とほぼ標高を一にしており、おそらく南側の延長を検出した形であろう。流路は、これも第 3 次調査で南北方向の溝が検出されており、これとの関係が考えられる。

第3章 まとめ

梅林遺跡第7次調査の成果については以上の通りである。本調査地において検出したのは、縄文時 代から近世に至る遺構・遺物である。遺構面は2面設定し、調査範囲が狭かったにもかかわらず全体 的に良好に遺構が検出された。縄文時代の遺物は、サヌカイト製石匙が出土した。ただし、これは SD06溝出土として報告したが、溝の壁面である灰白色粗砂層から出土した可能性がぬぐいきれない。 基盤層とした灰白色土層が縄文時代の遺物包含層となる可能性がある。古代の遺構は、溝1条であ る。埋土が砂礫・シルト質土にて構成されており、流路としての機能が想定される。中世前半の遺構 は、溝1条である。古代の溝と位置・方向がほぼ同一で、中世段階での掘り直しの可能性が考えられ る。近世に入り、調査区北側は水田化されているが、南側は溝埋没後、湿地性の堆積層が形成されて いる。以下では、本調査区において検出した遺構を、隣接する第3次調査の成果に基づき検討してい <。

第 I 面で検出した水田面は、SD01溝を挟んで棚田状に2面あり、標高20 2~20 .6m を測る。第3 次調査第Ⅰ面にて検出された水田跡は「七隈川の主軸に沿って段々畠状に形成され」ており、標高は、 東側が20 A5m を測る。水田面の検出状況や標高をみるかぎり今次調査検出の第 I 面と、第 3 次調査 第 I 面に大きな差はなく、同一の面を検出したとしてよいだろう。なお、今次調査 区・ 区では、

区のような良好な水田面を検出することができなかった。特に 区では、植物遺体の混ざった湿地 性の堆積層が広がり、水田は調査区の東に逃げている可能性が高い。

第Ⅱ面では、溝2条・土壙1基を検出した。基盤層の灰白色砂礫層を検出面とした。標高は、 東側で19.8m・西側で19.6mを測る。溝は、今次調査 区・ 区間の谷状の落ちに流れ込んでいる。 第3次調査において、出土遺物が最も近いのは第4面 SD405溝である。これとの関係は、調査範囲 が狭小であることと谷状の落ちが調査できなかったため、現時点では不明である。

今回の調査では、3次調査第 I 面検出の近世水田跡の延長を検出した。しかし、第2から第4面の 水田跡は、検出し得なかった。調査面積の狭小さに加え、洪水による砂堆がほとんど確認できなかっ たためである。



第3次調査区と第7次調査区の位置

図 版 PLATES



1.1区第1面全景(南より)



2.1区第Ⅱ面全景(南より)



3 . || 区全景 (北より)

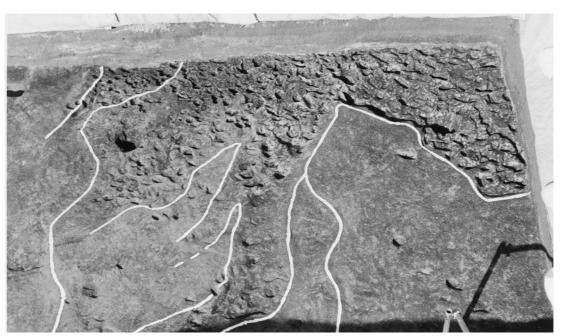
PI.2



1.Ⅲ区第Ⅰ面全景(南より)



2.Ⅱ区第Ⅱ面全景(南より)



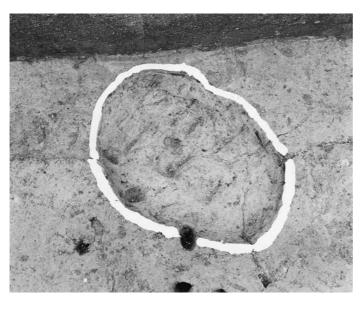
3 . I 区第 I 面 SD01溝検出状況 (南より)



1 .Ⅲ区 SD06·07溝検出状況(西より)



2 . III 区南壁 SD06・07 溝土層断面(北より)



3 . SK04土壙検出状況 (南より)

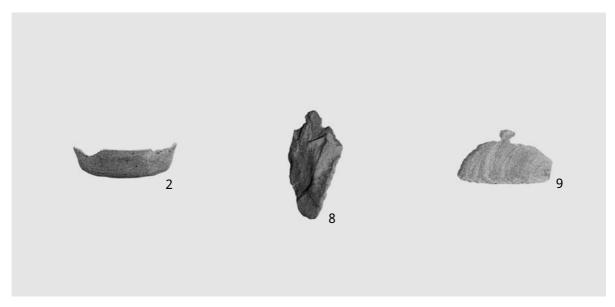
Pl.4



1.1区北壁土層断面(南より)



2. II 区東壁土層断面(西より)



3 . 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うめばやしいせき	
書名	梅林遺跡	
副書名	第7次調査	
巻次	7	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	第790集	
編著者名	阿部 泰之	
編集機関・発行機関	福岡市教育委員会	
発行年月日	平成16年 3 月31日	
市町村コード・作成法人 ID	40136	
所在地	福岡市中央区天神1-8-1	
郵便番号	810 - 8621	
遺跡名ふりがな	うめばやしいせき	
所収遺跡名	梅林遺跡	
所在地ふりがな	じょうなんくうめばやし 4 ちょうめ 1 - 10	
遺跡所在地	城南区梅林 4 丁目 1 - 10	
北緯 33°31 30	東経 130°21 38	
調査期間	20020204 ~ 20020404	
調査面積	479 82	
調査原因	都市計画道路建設	
種別	散布地 / 生産地	
主な時代	縄文/古代/近世	
遺跡概要		
縄文 - 石匙 / 古代 - 溝 2 - 須恵器 + 土師器 / 近世 - 水田 2 + 溝 1 - 陶磁器		

縄文 - 石匙 / 古代 - 溝 2 - 須恵器 + 土師器 / 近世 - 水田 2 + 溝 1 - 陶磁器

梅林遺跡 7

第7次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第790集

2004年(平成16年)3月31日

編集·発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 8 1

刷 佐伯印刷株式会社 福岡(営) 印 福岡市南区大楠3 27 1 402